

煙が目にしみる

民家園でボランテイアをしながら、こんなことを言うのも気が引けるが、少し苦手な家が2軒ある。広瀬家と清宮家。どちらも窓が小さく、閉鎖的で、囲炉裏の薪の具合によっては目も開けていられないほど、部屋に煙が充満するという、ただそれだけの理由である。

2、3年前になるうか、清宮家でまさにこうした事態になった。皆、立ち上がってあっちへこっちへと、煙を逃れている最中に、外国人の来園者が入って来られた。すかさずYさんが英語で「私が見えますか?」とたずねると、間髪を入れずに、「勿論見えますとも」と、答えが返ってきた。煙にむせながら、大笑いした覚えがある。これが煙ではなくて霧だったらロマンティックなのには思いながら。

炉端の会 今月のコラム



2、3百年前の古民家の暮らしの過酷さは、考えるまでもない。軒の低い屋根、小さな窓、太い棧、そして煙等々、が強風、大雨、獣害虫などから幸うじて身を守った一日の終わりに家族揃って囲炉裏を囲んだときの安心感は現在の私達の、快適さ、便利さ、効率の良さを際限なく求め続ける生活からは、想像もできないだろう。「家は生きるための砦であった」と、いうことを肝に銘じて、甘えたことを言わないと、自戒する。でも、近頃やけに煙が目にしみる。と、またまた年のせいにしてたりして。